

伊吹山と円空

—伊福山 法ノ泉の 湧出る
水汲玉ノ 神かと思ふ—

米原市教育委員会
2013.10



執筆／小島 梯次

伊吹山・十一面観音立像

撮影：寿福 滋

伊吹山と円空



ケボロ弁窟(北海道豊浦町礼文華)



善光寺(北海道伊達市有珠町)



善光寺の観音像



善光寺の観音像(背面刻書)

ケボロ弁窟の観音像「伊吹山平等岩僧内」

北海道伊達市有珠町・善光寺に安置されている観音像(写真)は、昭和52年に善光寺(写真)へ遷座されるまで洞爺湖中の島観音堂に祀られていた。背面に「うすおく乃いん小嶋 江州伊吹山平等岩僧内 寛文六年丙午七月廿八日始山登 圓空(花押)」(写真)という刻書があることで知られている。

本像は元々洞爺湖中の島観音堂にあった訳ではなく、虻田郡豊浦町礼文華のケボロ弁窟(写真)に、他の4体の像と共に祀られていたと菅江真澄(以下真澄と略す)が書いている(『蝦夷廻手布利』寛政三年 1791)。ケボロ弁窟は、洞爺湖より西南西30km程の海岸にある。大変に不便な場所であり、現在でも直接そこへ行く道は通っていない。海路を船でいくか、陸路ならば海岸までの断崖を30分ほどかけて下らねばならない。勿論先導者がいなければ到底わからない道筋である。真澄がケボロ弁窟を船で訪れた時、そこにはアイヌの人達が住んでいたと記しているから、円空の時もアイヌの人達の集落だっただろう。

ケボロ弁窟の像は、寛政十一年(1799)に松田伝十郎によって、像の背面に書かれていた各々の地へ送り届けられた(『北夷談』)。本像は「うすおく乃いん小嶋」(有珠奥の院小嶋)により、洞爺湖中の島へ送られたと考えられる。円空作仏より133年後である。

背銘中の「伊吹山平等岩」(写真)は、伊吹山南面の八合目辺りにある大岩盤である。伊吹山(写真)は古代より『古事記』『日本書紀』に伊吹山の神によってヤマトタケルノミコトが命を落とした山として名前が見られ、平安時代に沙門三修が山中で終生修業を行い、伊吹山寺(観音寺、弥高寺、太平寺、長尾寺)を開いたことで知られている。中世には、六合目以上は女人禁制の修験の山であったと記されている(寒川辰清『近江輿地誌略』)。円空が「伊吹山平等岩僧内」と書くからには、江戸の当時は修行者集団がいたことを想起させるが、そのことを詳しく知らしめる資料は遺されていない。「伊福山 法ノ泉の湧出る 水波玉ノ 神かとそ思ふ」と歌に詠んで、伊吹山に対して並々ならぬ敬意を寄せている円空は、果たして何時、どのような修行をしていたのだろうか。

淡海(近江)の国の円空

真澄はケボロ弁窟へ行く2年前の寛政元年(1789)に、久遠郡せたな町の太田権現で円空仏に出会ったことを「…斧作りの仏、堂のうちにいと多くたゝせ給ふは、淡海(近江)の国の円空といふほうしのこもりて、をこなひのいとまに、あらゆる仏を造りをさめ…」(『蝦夷喧辞辯』寛政元年 1789)と記している。太田権現にあった像が果たして円空仏であったかどうかについては疑問を持っているが、それはともかくとして、真澄が北海道で初めて出会った像の作者に「淡海(近江)の国の円空」という名前を出していることに関心が持たれる。

真澄の見聞録によれば、彼は前年の天明八年(1788)に、津軽半島の青森県東津軽郡外ヶ浜町・義経寺で初めて「円空」という名前に遭遇している(『率土が浜つたひ』天明八年 1788)。只、ここでは円空仏は秘仏で拝し得ず、円空については「…越前の国…足羽がもとより出たりける円空といふすけ(出家)…」と「越前の国」(福井県)出身の如く書いている。ところが、次に書く太田権現での記事に突如「淡海の国の円空」が登場するのである。これは一体どのように解釈すればよいのだろうか。

当時、太田権現の仏像は「淡海の国の円空が彫った像」という伝承があったと考えるのが一番自然と思われる。松前藩史料『福山秘府』(松前弘長編集 安永九年 1780)中に「神体円空作」と記される所が25ヶ所もあるように、江戸期において北海道では「円空」という名前と「円空作仏像」は、かなり広汎に知ら

れていた、と考えられるからである。「淡海の国」は、ケボロ弁窟の「江州伊吹山平等岩僧内」と同根で、円空自身が北海道の各地でそのように名乗っていたことを想定させる。真澄は旅の途次、それをどこかで聞いたのだろう。

真澄が太田権現のことを記す中に「…小鍋、木枕、火うちけなど岩むろのおくにありけるは、夜こもりの人のためとか…」とあるのは、この洞窟で修行する人たちが何人もいたことを推定させる。円空がこの洞窟で修行したと伝えられるのは、真澄が訪れた時より120余年も前のことである。その間には、非常に多くの人達がこの洞窟で修行したと思われる。しかし、真澄の記載の中で人物名がでてくるのは「円空」唯1人である。このことは、円空がカリスマ性のある人物であったことを証している。

北海道では円空の出身地は「近江の国」とされてきたようで、昭和における円空研究の最初の頃までそうであったと聞いている。円空の「伊吹山平等岩僧内」に対する思いが、いかに大きかったかが推し量られる。

伊吹山の十一面観音

米原市春照(旧伊吹町)の観音堂に祀られている十一面観音(写真)は、180.5cmの堂々たる大作である。表情は柔和で優しいが、刻線は強く全体のバランスもよい。円空の確かな腕の冴えがみられる優作であり、代表作にも挙げられる。そして本像をさらに注目させているのは、その背銘である。

背面一杯に、梵字、漢詩、和歌が墨書されており、その下に「元禄二己巳年三月初七日」(1689・58歳)という年月日と共に「四日木切 五日加持 六日作 七日開眼」という貴重な墨書がある。これによって、堅い桜の木のこれだけ大きな像を、円空はたった一日で彫り上げていたことがわかる。又、彫る前に木を清める加持に一日をかけ、彫った後に像に魂を入れる開眼にも同じように一日をあてていることもわかる。円空は、単なる彫刻作品を彫っていた訳ではなく、神仏像を彫っていたのである。それには自身で御衣木加持を施し、開眼供養をするという敬虔な態度があり、そこに円空の卓越した創造力と技術が付加され、独特の円空像が生まれる。円空仏が、私達の胸を打つ所以である。

七言絶句の漢詩「桜朶花枝艶更芳 観音香力透蘭房 東風吹送終成笑 好向筵前定幾場」は、「桜の花が満開である 観音の功德のような(桜花の)香りが一面に漂っている 東風(春風)が吹き春爛漫のこの時に(十一面観音を)造像し終わった さあこの像を祀る場所を定めよう」という風に解釈される。「於志南辺天 春仁安宇身 乃 草木末天 誠仁成留 山櫻賀南」という和歌も「春に会う(近江の)すべての草木は本来の真実の姿を現す その中の山桜から誠の(十一面観音を)彫り上げました」と訳され、内容は漢詩と同じである。

最後の「中之坊祐春代」で、円空が訪れた時の「中之坊」の住職が「祐春」であったことがわかる。北海道へ行く前に平等岩で修行していた時も「中之坊」を拠点としていたのかもしれない。

十一面観音は、以前は伊吹山西側中腹にあった太平寺集落の観音堂に祀られていた。太平寺集落は、昭和38年1月に豪雪の中で孤立したことで、セメント工場の進出を契機に、同年12月に全15戸が現在地に集団移住された。現在の観音堂は、旧太平寺集落にあった堂を、前面を増築して移築したものである。太平寺集落にあった多くの石造物も、観音堂の横に集められている。

尚、この十一面観音のお腹をみるとかなり出っ張っている。それゆえにか、本像は安産の神様としても信仰されている。日本人の信仰の融通無碍が感じられる。



平等岩(伊吹山八号目)





十一面観音立像(180.5cm/大平観音堂/米原市春照/市指定文化財) 撮影:寿福 滋



不動明王立像 撮影:米原市教育委員会
(100.0cm/光明院/米原市加勢野/市指定文化財)

光明院の不動明王

修験者であった円空は、修験道の本尊である不動明王像を全国各地に彫り遺している。その数は81体が確認されるが、本像は5番目の大きさである。

頭頂の蓮は高く、弁髪を左肩に垂らし、額には水波といわれる皺を刻み、右牙を上、左牙を下に向けている。

憤怒相の中に、微かな笑みが見られ慈悲相も同時に彫り込むという円空特有の表情である。

条帛を左肩から垂らし腹部に巻き、裳の部分は円空独特の鱗状の紋様であり、右手に剣、左手に絹索という姿で岩上に立つ。

ノミ跡は鋭く強く、確かな腕の冴えをみせており、太平寺の十一面観音と同じ元禄二年造像であると思われる。



光明院

カ
ン
マ
ン
ウ

カーンマン
(不動明王)

キヤ ウ

(十一面観音) (最勝の)

ベイシラマンダヤ

(毘沙門天)

ア
ビ
ラ
ウ
ン
ケ
ン
ア
ラ
バ
シ
ヤ
キ
ヤ
ア
バ
ン
ラ
ン
カ
ン
ケ
ン

アビラウンケン
(大日如来報身真言)

アラバシヤキヤ
(普通はアラハシヤナウ)

(大日如来応身真言)

アバンランカンケン
(大日如来法身真言)

桜
朶
花
枝
艶
更
芳
観
音
香
力
透
蘭
房
東
風
吹
送
終
成
笑
好
向
蓮
前
定
幾
場

おうだかしえんにしてさら
にかんばし

かんのんこうりきらんぼう
にとおる

とうふうふきおくってつい
にわらいをなす

よしえんぜんにむかってじ
よういくば

於志南辺天
春仁安宇身乃
草木末天
誠仁成留
山櫻賀南

ヲシナベテ

アウミノ

マテ

サクラカナ

ナ

四日木切 五日加持
六日作 七日開眼
圓空沙門
元禄二己年
三月初七日
中之坊祐春代

(花押)

円空の生涯と作品

出生と出家

群馬県富岡市一之宮・貫前神社旧蔵(現・千葉県山武郡芝山町・はにわ博物館蔵)の『大般若経』断簡に、円空の字で「壬申年生美濃国圓空」と書かれている。これによって、円空が「壬申年」(寛永九年 1632)の生まれだと解る。

しかし、生まれた場所について「美濃国」のどこであったのかは記されていない。

円空の出生地について、寛政二年(1790)に刊行された京都の国学者の伴蒿蹊著『近世崎人伝』(僧円空附俊乗)冒頭の「僧円空は美濃国竹が鼻といふ所の人也」が最もよく引用される。この記述は、伴蒿蹊の友人である画家の三熊思考が高山市丹生川町・千光寺を訪れた時の見聞をもとにして書かれている。「竹が鼻」は現在の岐阜県羽島市竹鼻町のことを指している。

「文政九年」(1826)の日付がある下呂市金山町祖師野・薬師堂の木札『圓空彫刻靈告薬師』にも円空が「竹ヶ鼻」で生まれたと記されている。「文政九年」は、『近世崎人伝』が刊行されてから36年後であり、そこからの引用があるかもしれない。しかしながら「竹ヶ鼻」を除いて両書の内容は全く関連のない事柄が書かれており、「竹ヶ鼻」だけを『近世崎人伝』から引用したとするのは不自然に思われる。もし木札が独自に書かれたものであるならば、「竹ヶ鼻」のもつ意味は大きい。

「予母の命に代る 袈裟なれや 法の形は 万代へん」という円空の歌があり、円空の出家の動機が母親の死であったことが想定される。

円空の出家について、『近世崎人伝』は「…稚きより出家し、某の寺にありしが、…」と記すのみである。名古屋市中川区荒子町・荒子観音寺蔵の『浄海雜記』には「…幼時歸台門…」と〔幼い時に天台宗に入った〕と書かれている。尾張藩士桑山好之著『金鱗九十九塵』(天保・弘化 1830~40頃)には、「…かの円空は、最初禅門たりしが、…」と興味ある記事を載せるが、それを実証する他の資料はない。岐阜県立図書館所蔵の『真宗東派本末一派寺院明細帳拾五冊之内十』明治五年(1872)に「…一 徳仁寺末 美濃國中嶋郡中村 卯寶寺 寛文年中本寺徳仁寺第八世浄圓法弟圓空創建…」とある。この文言によれば、円空は真宗の徳仁寺出身ということになる。

天台宗、禅宗、真宗と色々な宗派が出るが、それだけ円空の出家については不確かということであり、どの説も断定できるほどの信頼性は少ない。したがって、円空が何歳の時に何処で出家したかを確定することはできない。

円空仏誕生

知られる円空の最初の行跡は、郡上市美並町根村・神明神社に祀られる天照皇太神、八幡大菩薩、阿賀田大権現の造像である。棟札によって寛文三年の円空作と解るが、円空仏特有の個性はまだ見られない。

極初期像は、美並町を中心とした岐阜県に多く点在しており、美並町27体、郡上市八幡町3体、関市4体、岐阜市4体、三重県3体、愛知県1体である。

円空が北海道に渡ったのは、『津軽藩日記』の寛文六年正月二十九日の条「円空と申旅僧耆人長町に罷在候処御国に措置中間敷由仰出供に付而其段申渡候へは今廿六日に罷出青森へ罷越松前へ参由」の記述、及び道内に現存する背面に年号のある像3体(広尾郡広尾町・禅林寺の観音「寛文六年丙午夏六月吉日」、伊達市有珠町・善光寺安置の観音「寛文六丙午七月廿八日」、寿都郡寿都町・海神社蔵観音「寛文六年丙午八月十一日」)により、寛文六年(1666・35歳)の春頃と推定される。



護法神(住吉神社/岐阜県高山市丹生川町)

円空がいかなる意図をもって渡道したのか明確ではない。当時の北海道は、円空渡道3年前の寛文三年に白嶽の大噴火により多数の死者を出しその余燼冷めやらぬ時であり、寛文九年には「シャクシャインの乱」と称せられるアイヌの大叛乱が記録されているように和人とアイヌ人との摩擦の多かった時でもある。こういう時に渡道した円空は、危険な地域を多く踏破したであろうことは想像に難くない。『近世畸人伝』には「蝦夷の地に渡り、佛の道しらぬ所にて、法を説て化度せられければ、その地の人は今に至りて、今釋迦と名づけて餘光をたふとむと聞ゆ。」と載る。

北海道に遺る円空仏は、円空仏特有の奔放さは欠けるけれども、いかにも真摯な感じをうける像が多い。道内で、現在確認される円空仏は45体（移入仏6体を除く）であり、そのほとんどが道南地方に点在している。

東北地方で確認される円空仏は現在28体であり、青森県が14体で最も多く、次いで秋田県12体、宮城県1体、山形県1体である。外に秋田県内に未公表の円空仏が数体あるという情報も得ている。

像容は、山形県見政寺の観音像を除けば、すべてが北海道にのこる像と極めて類似しており、北海道の像とほとんど同時期に造像したものと考えられる。それ故に東北地方の像は、円空が北海道の往路あるいは帰路に造像したかが問題になる。私は像背に書かれている梵字及び像容の推移から、下北半島から渡道し、津軽半島へ戻ったと考えている。円空は、現在確認される像から推定して、秋田県湯沢市上院内・愛宕神社の十一面観音、宮城県宮城郡松島町・瑞巖寺の釈迦如来像を最後に、北海道、東北の巡錫を終え愛知、岐阜へ戻っている。

円空仏開眼

北海道、東北から帰った円空は、羽島市上中町・中観音堂、名古屋市千種区田代町・鉦薬師等の諸像を造頭、その後奈良、三重両県に巡錫の足を伸ばす。

奈良県吉野郡天川村栃尾・観音堂には、四体の円空像が安置されている。観音を中心として左右に金剛童子、大弁才天女を配するという変わった組み合わせの三尊と護法神である。本尊観音の背面に刳り貫きがあり、中に小観音像が納められている。この像を加えれば栃尾観音堂の像は5体になる。護法神(写真)は、角材に彫られた二頭身の像である。かつては、近在の民家で荒神として祀られていたと聞くので、あるいは荒神の尊名の方がふさわしいかもしれない。円空像の特徴の一つである抽象性の萌芽が見られる。怒髪形の形からの連想か、箒菩薩と呼ばれている。

栃尾は修験道の中心である大峯山登拝口であり、円空が栃尾に来たのは大峯修行が目的であったと思われる。大峯修行には、弥山山籠、山上ヶ岳登拝、箒の窟籠等がある。円空歌集中に「こけむしろ 箒の窟にしきのへて 長夜のこる のりのとほしみ」という歌を始めとして「箒の窟」(写真)を詠んだ歌が三首ある。箒の窟年籠をしたことがこれらの歌から推し量られるが、私はこれを延宝元年(1673 寛文十三年九月に延宝に改元)から二年にかけてのことと推定している。

箒の窟年籠は、大峯修行の中で最も苛酷といわれる。伊吹山での修行を初めとして、各所の霊山登拝を数多く経験してきた円空は、この時42歳、心身共に最も壮健であったと思われ、果敢にこの難行に挑んだことだろう。極寒の窟での修行がいかに厳しいものであったかは想像に余りあるが、後年自らを「金峯箒窟圓空」と名乗っているところをみると、この箒の窟年籠が円空にとっていかに大きな比重を占めていたかがわかる。

志摩市阿児町立神・少林寺には観音・龍王、木端様の観音、護法神の3体が安置されている。これらの像は、同地区に残る円空補修の「大般若経」に書かれている「延宝二年」(1674)により、そのころの造像と考えられる。護法神(写真)は顔面に最小限の彫刻を施しただけの極めて抽象性の強い像である。彫りは澁みなく、この像の存在で延宝二年に円空様式の大きな特徴の一つである抽象性が確立されたといえる。



護法神(栃尾観音堂/奈良県天川村)



箒の窟(奈良県吉野郡上北山村)



護法神(少林寺/三重県志摩市阿児町)

名古屋市中川区・荒子観音寺には、1255体の円空仏が現存し、他へ遷座している像11体も含めれば1266体が確認でき、正に円空仏の宝庫といってもよい寺である。荒子観音寺の『浄海雜記』巻三には「兩頭愛染法一冊 奥書云 延寶四丙辰年極月廿五日 日本修行乞食沙門 圓空(花押)」の記載がある。『兩頭愛染法』自体は現在所在不明であるが、この記事により円空が延寶四年に荒子観音寺に留錫していたことがわかる。延寶二年の志摩半島の像との様式上の連なりから、荒子観音寺の円空仏のほとんどが延寶四年に造像されたと推定される。

「護法神」の背銘がある像は、強い彫りと抽象性を合わせ持ち、二頭身であるが不自然さを全く感じさせず、最も円空らしい特徴を示している像である(写真)。背面に「(梵字) 護法神 イクタヒモ タヘテモ タルル三會テラ 九十六ヨクスエノヨマモ 円空(花押)」の墨書がある(写真)。添えられた和歌は、「仏法は 何度絶えても 再興させよう 九十六億年後の世までも」と解される。弥勒菩薩が五十六億七千万年後にこの世に下生して、三會の説法をし、その第一會に九十六億人の衆生を済度するという仏説が根底にあり、それまで仏法を守り抜こう、庶民を救済しようという「護法」に対する円空の強い決意が示された歌である。円空のこの思いの強いことは、ほとんど同じ歌が各所で五首も詠まれていることから察せられる。円空が各地に遺した像の中に多数の怒髪「護法神」と称される像がある。「護法神」は円空の自身像であり、「護法」のため全国各地に自身像を彫り遺したと私には思われる。高山市丹生川町・住吉神社の護法神は、巡錫の旅をする円空の姿を彷彿とさせる(写真)。

通称木端仏と称される群像がある。木端仏は通称の如く、まさに木端に、それも全く不揃いの板切れに目、鼻、口を申しわけ程度につけただけの像である。円空の造像における特質の一つは、捨てられるような木片に、最小限の彫刻で拜まれるべき尊像に変容させることにありと思うが、木端仏はこの特質を具現化している典型的な例である(写真)。

荒子観音寺境内の多宝塔から、1024体の千面菩薩(写真)がぎっしりと納められた小さな厨子が発見されたのは昭和47年のことである。厨子の前面に、円空自筆で「(観音種子) 南無大悲千面菩薩 鎮民子守之神 觀(マヽ)喜沙門 四鎮如意野會所 信受護法」とあり、後面には「是也此之 クサレルウキタ トリアケテ 子守ノ 神ト我盤成奈里」という和歌が書かれている。「千面菩薩」の名称は、仏教関係の辞典になく円空の独創と考えられる。『法華經 普門品』に出る観音三十三応化身の功德を更に拡大し、千の観音による千の救い、すなわち観音一千応化身による、より大きな救済を示す尊名である。前面の「觀喜沙門」は当時の円空の心情を表しており、「信受護法」は〔信じて護法を受ける〕であり、円空が自ら〔護法神〕たらんという強い決意が示されている文言である。後面の歌は「たとえどのように朽ちた木からでも、普く衆生を救うための神仏像を、私は彫るつもりである」と、円空の造像意図を端的に示している。

円空仏展開

郡上市美並町杉原・熊野神社の十一面観音背面に「白山詫告言 千多羅瀧 是有廟 即世尊 延寶七己未年六月十五日 圓空敬白」という白山神の託宣が書かれている。同社社務所の不動明王、同町下田・愛宕社の不動明王及び同八幡町千虎・不動堂の不動明王の3体にも、ほぼ同文、同日付の背銘がある。「詫」は「託」の異体字であり、「延寶七己未年六月十五日」に「千多羅瀧」で白山神の託宣を聞いたということであろう。「千多羅瀧」は八幡町にある千虎の滝と考えられる。

託宣の中身「是有廟 即世尊」は、「廟」は仏の住む所であり、「世尊」(仏)と同じであるという意味にとれる。そして4体共に書かれている「是有廟」の「是」は〔円空像〕そのものと解釈出来る。崇拜してやまない白山神から〔あなたの彫る像は「廟」である、すなわち「仏」である〕と告げられたのだから、円空はどんなに感激し自信を得たことだろう。それ故にこそ4体もの像に、この託宣を書いたのだと思われる。円空はこの後、関東へ歩を向けている。

円空が関東へ向かった直接の動機は、当時関東修験の中心であった不動院の本尊造像のためであったと私は推定している。不動院は現在廃寺になっているが、かつて武蔵国葛飾郡幸手領小湊村(現・春日部市小湊)にあった関東地区の本山派修験寺院を統轄していた寺である。円空が関東を巡錫した年は、遺された資料からは、延寶八年(1680)、同九年(1681・9月に天和に改



護法神(荒子観音寺/名古屋市)



護法神背面(荒子観音寺/名古屋市)



両面宿儺像(千光寺/岐阜県高山市丹生川町)



木端仏(荒子観音寺/名古屋市)



千面菩薩(荒子観音寺/名古屋市)

※荒子観音寺写真・前田清逸氏



役行者像(大善院/さいたま市浦和区)

元)、天和二年(1682)である。関東地方に遺る円空仏は、現在205体(移入仏21体を除く)に及ぶ。

関東地方には、さいたま市浦和区東仲町・大善院を初めとして^{えんのぎょうじゃぞう}役行者像が10体遺されている(写真)。修験者円空が、修験道の祖である役行者を数多く彫っているかというそうではない。円空仏が最も多く遺る愛知県には、荒子観音寺の千面菩薩中の1体だけである。活動の中心であった岐阜県では、郡上市で最近一体が公表されたが当地作であるのか由来が明確ではない。他には、大和郡山市・松尾寺の像が知られているだけである。関東に役行者像が集中的に多く遺されていることは、関東で円空は修験道に対して強い意識を持っていたと言える。

後年における円空の活動の舞台は飛騨が中心であり、高山市丹生川町・千光寺はその本拠となった地である。千光寺には60余体の円空仏が現存し、いずれの像も円空が最も円熟した時期の作で、造形的に頂点を極めている像群といっても過言ではない。円空の最高傑作と多くの人に賞賛されているのが^{りょうめんすくになぞう}両面宿儺像である(写真)。両面宿儺は、『日本書紀』の仁徳紀に朝廷に反抗した、両面に顔があり手が六本もあるというおどろおどろしい人物として載せられている。勿論そんな人間がいるはずもなく、それほど頑強に抵抗したという証しなのだろう。両面宿儺は、中央では悪役でも飛騨では英雄である。当時飛騨一帯に大きな勢力を持っていたものと思われ、千光寺開創の伝承もある。両面宿儺像は、幅33.3cm、奥行18.3cmの角材から造像されている。背面は手斧で削った跡がそのまま残っており、もとは梁であったと思われる。本来両面にあるとされる顔は前面に並列して彫られており、眼球を突出させた大きな鼻と分厚い唇の表情は、逞しさの中に哀愁を浮かべている。中央権力によって滅ぼされた飛騨の勇者の強さと悲しさが同時に彫りこまれている。身体部は甲冑を着け腰に刀を差し、四本の腕が彫られ二手で斧を持つ。渦巻唐草紋様の光背で高い岩座の上に座し、形態の確実さと力強さが拝する者に迫ってくる。円空の腕の冴えが見事に結実した造形であり、まさに円空の代表作としてもよい像である。

富山市蟹寺地区には、白山神社と慈眼院という社寺があり、各々に円空の神像2体、仏像2体が安置されている。江戸時代、蟹寺集落の民家は7戸であり、現在蟹寺には、民家に6体と慈眼院に1体の小観音像が遺っている。慈眼院の像は民家から移座したものと思われ、円空はすべての民家に像を彫り与えていたことになる。神社には神像を祀り、寺院があれば仏像を彫り、民家にはそこにふさわしい像を与える。円空にとって、すべての神仏像が彫る、すべての場所が祀る、そしてすべての人が与える対象であった。

高山市上宝町金木戸・観音堂旧蔵(現 同町長倉・桂峯寺)の今上皇帝像背銘に「元禄三庚午九月廿六日 今上皇帝 當國万佛 十マ佛作已」とある。「元禄三庚午九月廿六日」によって、上宝町の多くの円空像が元禄三年(1690)の頃に位置づけられる。「今上皇帝」は、円空が天皇を神仏と同列においていたことを示している。「當國万佛 十マ佛作已」を「當國(飛騨国)で一万體、全国で十万體の仏像を彫り終えた」という訳が通説の如くに流布している。しかしながら近年この読み方に異論も出ている。「當國万佛 十部佛作已」、あるいは「當國万佛 千面佛作已」というものであり、今後の研究課題となっている。





虚空蔵菩薩(高賀神社/岐阜県関市)



円空の墓(弥勒寺/岐阜県関市)

最晩年に円空が滞在した関市洞戸・高賀神社には28体の円空像が遺されており、現在は円空資料館に収蔵され一般公開されている。円空は高賀神社で降雨祈願の為に大般若経を真読誦し、その旨を懸仏裏に書き記しており、そこに「元禄五年」(1692)の年号がある。高賀神社には円空の和歌1500余首もある。これらの歌は和歌集として纏められていたわけではなく、円空が大般若経を修復した際にその見返し用として貼り付けてあった紙に書かれていたものである。従って、神仏に捧げる為、あるいは円空の覚えとしての歌稿であるが、それ故に円空の本音がみられ貴重な資料となっている。この大般若経に挿まれていた紙片にも「元禄五年」の文字がある。

高賀神社の円空像中、最も目を惹くのが虚空蔵菩薩である。最晩年の像にふさわしく、大変穏やかな優しい表情をしている(写真)。十一面観音、善財童子、善女龍王の三尊は、円空の円熟した腕の冴えを示している。この3体は、一本の丸木を縦に二つに割り、片方で十一面観音を彫り、もう一方をさらに二つ割にして善財童子と善女龍王を彫るという卓越した木取りがなされている。造像するための木を決して無駄にしなかった円空の面目躍如である。

円空入定

円空は生きてまま土中に入り五十六億七千万年後にこの世に現れる弥勒如来を待つという、いわゆる入定をしたとも言われている。円空が入定したという確実な資料はないが、状況証拠はいくつか挙げられる。

高賀神社に蔵される歓喜天の台座に「釜且 入定也」という注目すべき文字が刻書されている。「入定也」に視点をあてれば、円空が入定のために刻書したとも考えられる。入定するためには穀断ち等の千日行が必要とされる。円空が遷化したのは、弥勒寺に遺る墓碑銘により、元禄八年(1695・64歳)七月十五日である。円空は元禄五年に高賀神社にいたことがわかっているが、以後同八年までの足跡は全く不明であり、千日行に入っていたという推測もさせる。高賀神社に夥しい歌稿を遺しているが、これは元禄五年をもって歌を詠むのをやめたということになる。又、同社には円空の龍が彫られた錫杖も遺されており、これ以上巡錫をしないとということにもなる。これらは円空が入定するための行為であったことを思わせる。

しかしながら、円空入定説に疑問が無い訳ではない。円空が弟子の円長に授与した「授決集最秘師資相承血脉譜」が弥勒寺に遺っているが、その日付をみると「元禄八年七月十三日」になっている。これは円空遷化の2日前であり、千日行最終の土中にいるはずの円空がそんなことができるのかという疑問が湧く。入定するとい

うことは、恐らく当時において極めて大きな事件だったと思われる。ところが記録、資料は無論のこと、目撃談等の書かれた資料が全くないことも円空入定説の一つの疑問である。私は円空を入定させたいと思っているが、断定することに躊躇も感じている。

小島 梯次
(こじま・ていじ)

1942年、愛知県に生まれる。名古屋大学文学部美学美術史卒業。
円空学会理事長。愛知県史文化財部会特別調査委員。

【主な論文】

「子供と遊ぶ円空仏」「離郷の円空仏」(円空研究)、「円空仏覚書Ⅰ～Ⅸ」(行動と文化)、「愛知県の円空仏」(愛知県史)、「円空の生涯と作品」(円空展図録)など

★掲載写真については、撮影者の明記がないものは、すべて小島梯次氏より提供いただきました★

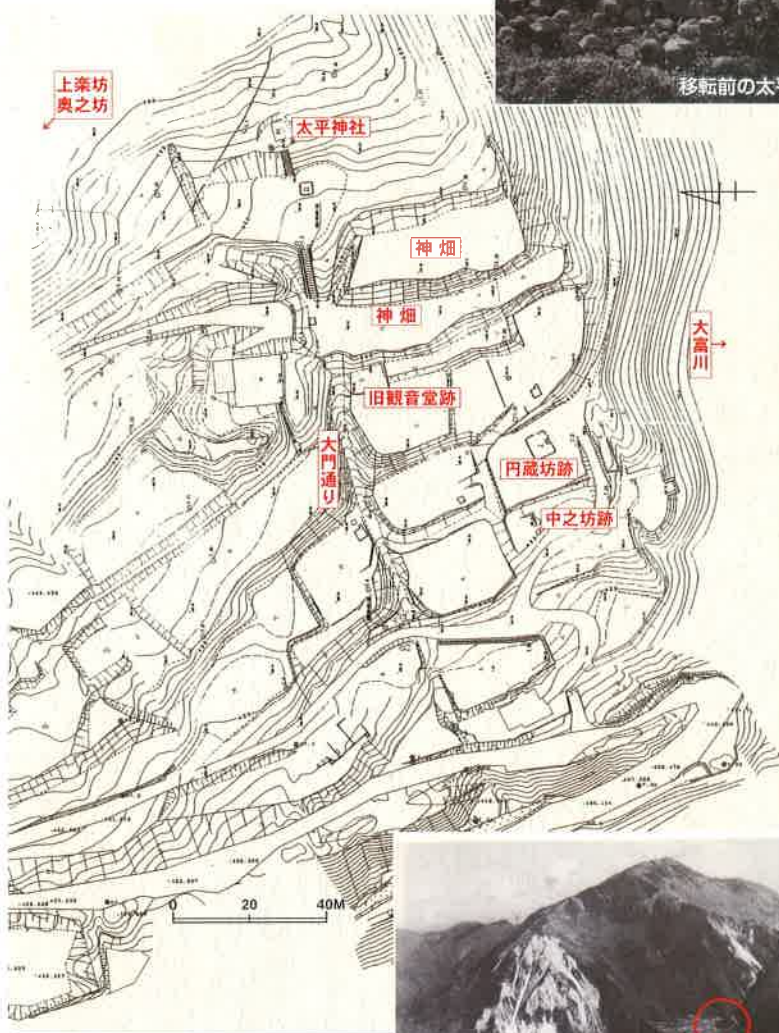
太平寺跡—円空伊吹山修行の拠点—

伊吹山から張り出す尾根の中ほど、標高約450m付近に築かれた山岳寺院が太平寺です。太平寺は、仁寿年間(851~4)三修によって整えられた伊吹山寺の主要寺院で、鎌倉時代には、弥高寺とお互いに伊吹山寺の本寺を主張し、争いを起すほどの力を持ち、徳治三年(1308)に和与(和議)が成立しています。

また、伊吹山寺の衆徒や山伏は、鎌倉幕府倒幕をめざす後醍醐天皇方として活躍したようで、元弘三年(1333)には、太平寺に逗留していた龜山上皇の皇子守良親王を奉じて、中山道番場宿(米原市番場)で京都を追われてきた北条氏の武士団を全滅させる働きをします。北近江の守護・京極氏は初代氏信以降、太平寺城を拠点にしたともいわれていて、山岳寺院の立地と施設を利用して、城郭としていたものと考えられます。

天文五年(1536)年の記録には、30坊ほどの塔頭がみられた太平寺ですが、江戸時代には中之坊など、わずかしかなかったようで、特産の石灰を生産しています。

昭和38年、集落上方の斜面がセメント鉱山になったのを期に、15戸の集落は、惜しまれながら米原市春照に集団移住しました。
(米原市教育委員会)



移転前の太平寺集落



伊吹山古写真(昭和28年) ○印が太平寺跡

★太平寺跡は鉱山敷地内ですので立ち入りには許可が必要です★

【太平寺跡の構造】

太平寺跡の北側はセメント鉱山の開発でかなり改変されていますが、南側には、円蔵坊跡や、円空が止宿した中之坊跡が残っています。天文五年(1536)の伊吹社奉加帳に35坊がしるされる太平寺は、太平神社(本堂か)を頂点にして、大門筋を中心に坊院が展開し、南端は大富川に面して中之坊跡・円蔵坊跡、北は上楽坊跡や奥之坊跡までの東西約200m×南北約300mの範囲が想定できます。

そして、伊吹四ヶ寺が衰退した近世以降は、修行者の宿坊として機能を維持していた寺城南端の中之坊や円蔵坊を中心に規模を縮小して成立していたようです。



集落跡(太平寺僧坊跡) 撮影:米原市教育委員会

円空年譜(括弧は典拠)

寛永9	壬申	1632	1	○美濃国(岐阜県)で出生(群馬県富岡市一之宮・貫前神社旧蔵『大般若経』断簡)。
寛文3	癸卯	1663	32	○11月6日、岐阜県郡上市美並町根村・神明神社の天照皇太神、阿賀田大権現、八幡大菩薩を造像(棟札)。
寛文4	甲辰	1664	33	○9月吉日、美並町福野・白山神社の阿弥陀を造像(背銘・棟札)。 ○12月、同町勝原・子安神社の諸像を造像(棟札)。
寛文6	丙午	1666	35	○1月26日、青森県弘前城下を追われ、下北半島を経て北海道松前に渡る(『津軽藩御国日記』)。 ○6月吉日、北海道広尾郡広尾町・禅林寺の観音を造像(背銘)。 ○7月28日、同伊達市有珠町・善光寺の観音を造像(背銘)。 ○8月11日、同寿都郡寿都町・海神社の観音を造像(背銘)。
寛文7	丁未	1667	36	○愛知県海部郡大治町・宝昌寺の観音を造像(底面刻書)。
寛文9	己酉	1669	38	○10月18日、岐阜県関市雁首礼・白山神社の白山本地仏三尊を造像(棟札)。 ○愛知県名古屋市中千種区田代町・錠薬師堂の諸像を造像(『張氏家譜』・『那古野府城志』)。
寛文10	庚戌	1670	39	○美並町黒地・神明社の天照皇太神を造像(棟札)。
寛文11	辛亥	1671	40	○3月28日、岐阜県美濃加茂市下廿屋・個人蔵の馬頭観音を造像(棟札)。 ○7月15日、奈良県生駒郡斑鳩町・法隆寺の巡幸春塘から「法相中宗血脈仏子」を受ける(関市池尻・弥勒寺蔵「同血脈」写)。 ○関市菅谷・個人蔵の不動明王を造像(厨子天井銘)。
寛文12	壬子	1672	41	○5月下旬、郡上市白鳥町・長瀧寺阿名院の十一面観音を造像(背銘)。 ○6月吉日、美並町半在・八坂神社の牛頭天王を造像(棟札)。
寛文13	癸丑	1673	42	○この頃、奈良県吉野郡天川村栃尾・観音堂の諸像を造像(本尊観音「像内納入紙片」)。
延宝2	甲寅	1674	43	○3月、三重県志摩市志摩町片田・片田地区蔵の『大般若経』六〇〇巻を修復し、その中に54枚の扉絵を描く(五七一巻奥書)。 ○6月上旬から8月中旬、同市阿児町立神・薬師堂の「大般若経」六〇〇巻を修復し、その中に130枚の扉絵を描く(同経付属文書)。 ○夏、阿児町立神・少林寺観音堂の本尊、観音・竜神を造像(木札)。
延宝3	乙卯	1675	44	○9月、奈良県大和郡山市松尾山・松尾寺の役行者を造像(背銘)。
延宝4	丙辰	1676	45	○立春、名古屋市守山区竜泉寺・龍泉寺の馬頭観音を造像(背銘)。 ○12月25日、同中川区荒子町・観音寺で『両頭愛染法』を书写する(『浄海雜記 三』)。
延宝7	己未	1679	48	○美並町杉原・熊野神社の十一面観音と不動明王、同下田・愛宕社の不動明王及び郡上市八幡町千虎・不動堂の不動明王像の背銘に、「是有廟 即世尊 延宝七年六月十五日」という白山神託を受けたことを書く(背銘)。 ○7月5日、滋賀県大津市園城寺町・園城寺の尊栄から「仏性常住金剛宝戒相承血脈」を受ける(弥勒寺蔵「同血脈」写)。 ○岐阜県羽島市上中町・中観音堂の護法神を造像(背銘)。
延宝8	庚申	1680	49	○9月中旬、茨城県笠間市大町・月崇寺の観音を造像(背銘)。
延宝9	辛酉	1681	50	○4月14日午前8時、富岡市一之宮・貫前神社で大般若経を見終り、七言絶句と和歌を詠み、生年を記す(同経奥書)。
天和2	壬戌	1682	51	○9月9日、栃木県鹿沼市北赤塚・広濟寺の千手観音を造像(背銘)。 ○9月吉日、栃木県日光市日光山内・光樹院の高岳から「サラサラ童子法」「七仏薬師一切秘法」等を受ける(美並町・星宮神社蔵・「同法書」)。
貞享元	甲子	1684	53	○春、関市洞戸高賀・高賀神社で漢詩を詠む(同漢詩)。 ○12月吉日、関市鳥屋市・不動堂の鰐口に同日の銘有(鰐口銘)。 ○12月25日、名古屋市熱田区神宮・熱田神宮で「読経口伝明鏡集」を书写す(弥勒寺蔵「妙法蓮華経二」裏面墨書)。 ○この頃、荒子観音の円盛から「天台円頓菩薩戒師資相承血脈譜」を受ける(弥勒寺蔵「妙法蓮華経二」裏面墨書)。
貞享2	乙丑	1685	54	○5月吉祥日、岐阜県高山市丹生川町下保・千光寺の弁財天を祀る厨子に同日の銘有(厨子銘)。 ○12月8日、丹生川町折敷地・長寿寺の円空仏を祀る薬師堂に、同日の日付がある棟札有(棟札)。
貞享3	丙寅	1686	55	○1月17日、羽島市狐穴・稲荷神社の稲荷三体を祀る厨子に「貞享三丙寅歳 濃州中島郡狐穴村 正月17日」の墨書がある(厨子銘)。 ○3月、高山市・民家に「貞享三年三月 円空自作 板殿村」と書かれている厨子有(厨子銘)。 ○6月吉日、丹生川町板殿・薬師堂の鰐口に同日の銘有(鰐口銘)。 ○6月25日、長野県木曾郡南木曾町三留野・天満宮の天神(現 同所・等覚寺)を造像(棟札)。 ○8月12日、等覚寺の弁財天並びに十五童子を造像(棟札)。
元禄2	己巳	1689	58	○3月7日、滋賀県米原市春照・大平観音堂の十一面観音を造像(背銘)。 ○8月9日、園城寺の尊栄から「授決集最秘師資相承血脈譜」を受ける(弥勒寺蔵「同血脈譜」)。 ○同日、同寺同師から「被召加末寺之事」を受け、自坊弥勒寺が園城寺の末寺になる(弥勒寺蔵「同文書」)。
元禄3	庚午	1690	59	○9月26日、高山市上宝町金木戸・観音堂の今上皇帝(現 同町長倉・桂峯寺)を造像(背銘)。
元禄4	辛未	1691	60	○1月吉祥日、熱田神宮で歌を詠む(高賀神社蔵「歌集」)。 ○4月20日、岐阜県下呂市金山町菅田・薬師堂の青面金剛神を造像(背銘)。 ○4月22日、下呂市下呂町小川・個人蔵の青面金剛神を造像(背銘)。 ○5月8日、高山市朝日町万石・八幡神社の八幡大菩薩を造像(背銘)。
元禄5	壬申	1692	61	○4月11日、高賀神社で降雨祈願の為に大般若経を真読誦し、その旨を懸仏裏に書き記す(同銘)。 ○5月吉日、大般若経内に「元禄五年壬申 曆五月吉日」と書いた紙片有(高賀神社蔵「同紙片」)。
元禄8	乙亥	1695	64	○7月13日、弟子圓長に「授決集最秘師資相承血脈譜」を受ける(弥勒寺蔵「同血脈譜」写)。 ○7月15日、入寂(墓碑銘)。